

知ることから始める人権学習

高浜町立内浦中学校 一年 上田 竜也

「人権学習はなぜ必要なのだろう。人が人のことを思いやるのは当たり前のことだし、差別やいじめはいけないなんて、だれでもわかっていることなのに、どうして中学生にもなって人権学習なんてするのだろう。」－今回の人権学習をするまでは、こう思っていました。

そんな中、人権学習の一環として、同和地区でのフィールドワークに出かけました。中学校一年生の僕は、中学校での人権学習を始めたばかりで、部落（同和）問題についてほとんど何も知らない状態でした。その地区は、僕の住んでいる近くにあり、僕自身よくそこに行きます。フィールドワークに行く前は、まさかこんな近くで差別があるとは思っていませんでした。だから、「こんなことがあったのだよ」と昔のことを聞かされるのだと思っていました。

フィールドワークでは、その地区出身のAさんが案内をしてくださいました。地区を歩いてまわりながら、いろいろな話をお聞きしました。今は大きくてきれいな道になっているところも、昔は細くて不便だったこと、整備された海岸やトイレがあるけれど、そこで差別落書きがたびたびあることなどを聞きました。また、一通り地区内を見てまわったあと、Aさんへの質疑応答の時間を持ちました。

その中で、Aさんは、今は目立った差別はないけれど、ねたみ差別や結婚差別があるとおっしゃっていました。実際、Aさん自身も結婚差別を体験されたそうです。これを聞いたとき、僕は大きなショックを受けました。こんな身近なところに差別があると思ってもいなかったからです。今もこのような差別があると知って、ふと、もしかしたら自分も何か差別を受けるのではないかと何とも言えない不安を感じました。

僕は、部落差別が始まった理由はなぜか質問してみました。どうやら昔の身分が関係しているんだろうけど、いろんな説もあってはっきりとした理由はないということを知ったときは、ものすごく不思議でした。これといったはっきりとした理由もないのにどうして差別を続けているのだろうと思ったからです。たぶん、差別を長い間続けてきたせいで、それが当たり前のようになって

差別が残ってきたのだと、僕は思いました。

ねたみ差別の一つとして、差別落書きの話がありました。Aさんは、ここに書かれた落書きだけを問題として取り上げるのではなく、落書きそのものがいけないものなのだと訴えておられました。でも、こんな差別落書きがあることを大きく取り上げなかったから、この地区に差別があることを僕たちが知らなかったのではないかと思いました。差別を受けながら、自分たちだけで解決しなくてはならないとしたら、僕だったら耐えられないだろうなとも思いました。

Aさんは、自分自身に起きた差別についても話してくださいました。その中で、結婚を断られたことがあるという話が心に残りました。Aさんがこの地区の出身であるということだけで結婚を断られたからです。Aさんにとってはつらい体験なのに、僕たちに話してくれたのは、人権問題についてしっかり考えてほしいという思いが強いからだと思いました。また、同じようなことを繰り返してほしくないという思いを感じました。

学校に戻ってからも、この体験を振り返りながら部落問題について考えました。それで、わかったことがありました。今回フィールドワークをして、まず、理由がないのだったら差別はやめるべきだという意見を持ちました。でも、よ

く考えてみると、その考えもおかしいということに気がつきました。たとえ理由があろうがなかろうが、差別はいけないのです。フィールドワークをして話を聞いたことで、差別には周りから見たらささいなことでも、差別を受けた人はものすごく傷つくことがわかりました。

これまでの僕は、差別に関わることは怖いことだと思っていました。そのことで、自分自身も差別されることを恐れていたからです。でも、それをさけて、差別の現実を知らないまま成長していくことのほうが、もっと恐ろしい将来が待っていると思いました。差別を知らないまま成長し、その人がまた差別を始めるかも知れないからです。僕自身、まだ知識もないし、様々な差別に対してじっくりと考えたことがないので、これからは正しく知って、もっと差別のことや人権の大切さについて考えていきたいと思いました。また、これからのその一つ一つの学習では、今回いろんな話をしてくださったAさんのことを思いながら、考えていきたいです。